ＣＨＯＳＨＩ（第４話）

合同練習が出来なくなった清真中だが、以前合同チームを組んでいた市内の中学校と練習試合を行った。しかしながら、相手中学校は９人、清真は７人なので相手中学校の先生と、清真の外部コーチに外野を守ってもらい、変則の練習試合を行った。

清真は最終回まで川口を温存した。貴重な練習試合で他の選手をマウンドに上げ、ピッチャーとしての経験を積ませる狙いがあった。そして最終回、満を持して川口が登板した。押見は川口に一つ課題を出した。

球離れが早くシュート回転する癖は、改善されていたがまだ完璧ではなかった。そのため右バッターにはアウトコースを中心とした攻め方になっていた。しかしこれでは、シード校などの強豪にはコースを合わされてしまう。そこで、キャッチャーにわざと右バッターのインコースに構えてもらうことにした。

相手の中学校は１年生もたくさん出場しているため、もしボールがシュートすれば逃げることはできない。少々危険な荒療治だが、これが総体前最後の試合であるし、こんなことを躊躇していれば大会で勝つことは厳しい。

川口のボールは空気を切り裂き、キャッチャーのミットに収まった。最早、野球の試合をピッチャーとキャッチャーと審判だけでやっているようになった。川口は全てのバッターを三振にとった。

試合後、野球部の保護者と話をしながら、大会前の日程を確認していた。
すると川口君のお爺さんが、川口と話しをしていた。お爺さんはいつも笑顔で孫の試合を見に来たので、今日のピッチングに満足されたと思っていたが、
いつもより力の入った感じで川口に話しをしていた。

『川口さん。いつもお世話になっています。押見です。だいぶコントロールが安定してきましたね。大会も楽しみですね。』と言うと、お爺さんはこう言った。『いや、まだまだですよ。インコースを投げる時に、ボールをおきにいっている。コースもまだ高いよ。』私はビックリした。自分も感じていたことをしっかり見抜いていたからだ。『お爺さん、野球詳しいですね。どこかでやられていましたか。』お爺さんは答えた。『銚商で少しね…、それと先生、私は川口じゃありませんよ。川口は、娘の旦那の名字なので。私は藤本、藤本忠勝です。』
『藤本……。はっとした。そしてお爺さんが帰ったあと、銚子商業野球部ＯＢでプロや社会人、大学野球で活躍した卒業生の進路を調べた。

１９６１年。岡本謙治。関根知雄。芝野靖夫。中居一雄。藤原進。藤本忠勝。